10月15日
(水曜日)
昭和44年
振替口座番号 東京41456
定価一ヵ月500円 一部10円

慶應義塾新聞
THE KEIO PRESS

〒108 東京都港区三田2—15—45
慶応義塾大学内 (4533) 1640
発行人兼編集者 飯田 黒

半月刊 ヶ月1日
(129)

10・10大統一行動

11月決戦へ怒濤の進撃

明治公園に十万人
デモの隊列は四キロに及ぶ

11月戦争の火ぶたが切られた十月十日、一昨年の十・八羽田闘争を山場闘争の死を乗り越へ闘い始め、日本闘争の新たな段階を切り開いた学生、労働者が、一年後の今日、市民を巻き込む闘争を倒的に押めてくれた。国家権力側の戦争の戦争の開催をはねのけ、青山から赤坂見附にかけて打ち砕ッ手の厳重に二重、三重、四重、五重の「警備体制」出一の決意になっていた。

この日、十一時過ぎから続々と集まってきた。ちょうど、三時過ぎには、目比谷公園の集会場は、学生、労働者が、一万人の結集を示した。午後、時半には、三時ちょうどに、集会開始。三時ちょうどに、集会開始。

11月決戦へ向けて怒涛の進撃を開始した民衆（青山一丁目）

大雨警報の中で三千人
10・8 全国全共闘中央政治集会

十八日、日比谷野外音楽堂で政策集会に分かれた。

明大に機動隊導入
10・9

起訴は四人
三田で逮捕の53人中

日吉の封鎖を解除
機動隊の監視下 教職員の手で
10月13日

9月30日
日大奪還闘争爆発する
神田一帯でゲリラ的に火炎ビン

九月三十日、神田一帯で繰られた日大奪還闘争は、今後の10・11闘争を前にして、多くの示唆を残した。機動隊の弾圧体制の着実な強化に対する、闘争主体の新たな対応、闘争の新たな段階を示唆している。

昨年、九月三〇日の日大全学闘争一周年の九月三〇日、日大全共闘は、七〇年安保決戦を闘い抜くことを確認し、再度、日大全学闘争の再開を宣言した。

学生会館中庭、約二千人の学生集会で、「日大全共闘集会」が開かれた。明大、法大、専大、早大、中大、日大、学生会館前

11月決戦・何をなすべきか

69年日本階級闘争はいまその山場にさしかかろうとしている。8月3日の大学治安立法強行採決を契機として開始された帝国主義者と革命的左翼の11月に向けた闘いは両者の攻撃的な展開をもってキリキリと階級関係をしぼり上げている。文部省突入—嘉手納基地突入—広大・早大・京大の連攻防戦—全国全共闘結成—日大寮潰闘争—10・10統一集会に対し、機動隊を駆使したバリケード破壊から大学の暴力的制圧—大量の予防的逮捕—長期拘留とまさに狂気の時代を型づくっている。戦後的なるものの終着から力と力の激突する時代へのドラスティックな転換はすべての人間に対し「沖縄の永久核基地化・安保の大改訂を君は許すのか」の問をつきつけている。革命的左翼はその十数年の歴史と、67年10・8以降の激動総体から、10・21から開始される11月の激闘のなかで真の試練にかけられているのだ。

既成左翼—社共はまたしても60年安保の敗北をくりかえそうとしている中で、革命的左翼にかけられた任務はきわめて重い。70年代を激動と希望に満ちた時代として向えるのか暗黒と反動と戦争の時代とするか二者択一しか許されないならばどんなに苦しくとも、躊躇なく前者を選択するだろう。

11月安保・沖縄決戦はもう目前に控えているのだ。それならば最後にこう宣言しなければならない。「安保粉砕、日帝打倒の敵を前に勝利を我が手に！」と。

論説

情況を主体化し　11月決戦を我が手に

三回目に赤衛隊を撤収されてから、早一月の盛り上がりをみせようとしている。

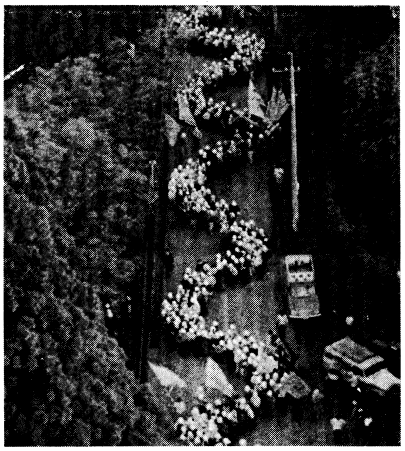
一月の盛り上がりをみせようとしている。キャンパスは全面、学園紛争の大詰状況にかかっている。バリケードがいたる所にあり、外の情況は、見掛のあの限りでは平穏だ。

一方、日共の長年、三分月余の期間にさされ続けられたバリケードが撤去されたのは、ほぼ、ひと安心だ。

その中では、珍しい安堵感を与えた。

十二月の長年、三分月余の期間に提案された「学園紛争の解決に関する提案」は、その内容は、「学園紛争の解決のための緊急措置法」の制定、防衛庁の「学園紛争の解決のための緊急措置法」の制定、防衛庁の「学園紛争の解決のための緊急措置法」の制定、防衛庁の

9,28 三里塚集会に 労・農・学一万三千人が結集



集会後にデモを行なう労働者（三里塚）

前日二日からの開催だった集会は国家権力による強制、妨害にもかかわらず、全国から集まった農民、学生、労働者の熱気あふれる集会となった。

集会は国家権力による強制、妨害にもかかわらず、全国から集まった農民、学生、労働者の熱気あふれる集会となった。

しかも、アメリカのブラック・パンサー党（黒豹党）の代表者らも中ロ武器援助反対を訴える「革命的国際主義者連帯」の旗を掲げ、集会に参加した。

集会は、三里塚の農民の他に、反戦青年委員会、全国学生自治会連絡会、全国高校生共闘会議、全国学生共闘会議、全国高校生共闘会議、全国学生共闘会議、全国高校生共闘会議、全国学生共闘会議

〈狂気〉の二日酔のあとは

〈起〉プロローグ

現在の状況が、言葉を稀薄して排除する力人に気狂いじみた冗談を強いるか、どちらかであるならば、政治の急勾配を一気に登りつめるこの時期の急激な流れと、急速に圧縮し続ける空間にたじろぐ者は何をロにすればよいのか。言葉に力を担せることが嫌いなのか、言葉そのものが力を持ち得ないものなのか、いちがいちかの選択肢はいつも極限を設定する。

この選択肢をのはりつめるときおおにして、沸かか、狂気かがやいてくるのだろう。

今や狂気も気情という抒情な内臓に飲み込まれ、充分に消化され、狂気の持っていた情感と闘いへのエネルギーのはてまでも吸い取られ、残ったものは、街中のやぶれ広告に映る、グルな「狂気」のポスター紙にしかならない。

何かへ自らの足を駆けさせて、はりつめた政治的緊張の糸をつまびく者の沈黙の中から読み取るものに、人はなげやりな微笑をおくるしかなく、ただ、皮肉な表情のない笑いを浮かべるだけなのだ。そこに言葉を持とうとして持たなかったものの後めたさが居相している。

どこかでは「就全な常識人としての自分、から出発しなければならなかった便逆が、その心情にきざす、「戦後的なものへの不活性、を如何に処理するのかが問題である。就全な常識人としての個は、戦後二十何年から、教育やら学問から、六十年安保、ベトナム戦争など混淆した意識の中に、混凝させながら、除々に変貌をとげているのだろうそれは、現実に自分を巻き込む、政治的な流動性のなかで否応なく知らざるを得ないものだった。

かつて大江健三郎は自分が日本という国家、あるいは日本人に服従するという形でものを考えたことがないのに気付く。しかもそれは偽り現実的であった。順応主義的性格であったということを意味するのではないように思われるむしろそれは、一般的に、戦後二十年のあいだに育った、われわれの年代の者に、国家への服従というタイプのものの考え方が欠如していることを明らかにしている。」（月刊紙の主張）うと言いた。国家への憎悪と服従という、心情のドラスティックなどこかで、オブラートに包んでいるものは何なのだろうか。

風船に化しつつある狂気のヘリを歩き続ける足下を、合理主義やら、実証主義やら、近代主義等々の風化しきれずとげのような突起を残したものが痛りなくも、あやふやにさせる。

戦後民主主義の実感を自らの中に沿体験しようとすることすら、何やら、後退しているようなそんな焦そうの中でぼくたちが、狂気の酔いの向うに見ようとしているものは何なのかさっぱり見当がつかない。

今回は戦後民主主義への型通訳感を保ちつつ狂気を描き続ける。大江健三郎の背骨にある戦後民主主義の幻影とそれへの異和感をテーマに主調低音を奏のれ悪く、明り当かせることにした。（編集部）

己の得体を知りたいものぞ

〈承〉

「何故、宗教ではいけないのか。それは、もっとはるかに、ちっぽけな、人間の、ちっぽけな、ちっぽけな、ちっぽけな